「星空と路ー上映室ー」トーク 佐藤徳政（FIVED）×瀬尾夏美（画家・作家）

開催日時：2017 年 2 月 26 日 13:30-14:30
話し手：佐藤徳政（FIVED）×瀬尾夏美（画家・作家）
進行：北野央（せんだいメディアテーク）

北野：今日はご来場いただきありがとうございます。メディアテークの北野と申します。これから、佐藤徳政さんと瀬尾夏美さんと一緒にアフタートークを始めさせていただきたいと思います。この「星空と路-上映室-」は、2011 年 5 月からメディアテークはやっております「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」という、震災の記録をしたいという方々をサポートするプラットフォームのような事業なのですが、そこに参加されている方々の映像を見ていただく機会として行っています。ここでは、完成前のものや、素材のもの、もしくは編集が加わった今日のような映像などを上映し、皆さんに見ていただければと 2012 年の 3 月から毎年 1 回行ってきました。
それで今日の映像について、最後に字幕が入っていたと思うのですが、昨年の 11 月に、「巨石装置五本松」というタイトルの展示をここメディアテーク 7 階のラウンジで行いまして、その時は写真やパネルや絵などを展示しました。それを制作されていたのが本日の佐藤徳政さんと、瀬尾夏美さんをはじめとした NOOK のメンバーの皆さんです。
その中で展示した映像を本日は見ていただいたのですが、（展示の際は）その背景や内容などをパネルで説明していたもので、あのような映像になっています。それで、今回はその振り返りを 3 人で行っていきたいと思っています。
ではまず、瀬尾さんのご紹介をさせていただきます。瀬尾さんは、映像作家の小森はるかさんという方と一緒にこの映像を撮られた方です。実際に映像を撮られたのは小森さんなのですが、瀬尾さんはその小森さんと一緒に 2012 年から陸前高田で震災のことや、その土地のことを絵や写真、言葉、映像で記録をされています。
それで、瀬尾さんは、小森さんは映像で撮られている同じ現場に居られたわけですよね。瀬尾さんは写真、絵、言葉で記録されているので、同じ現場にいてどういう風に見えているのか。もしくは陸前高田や、「森の前」という今回の映像の舞台の場所の意味とか、そこで何が行われているのかというのを、写真で最初に瀬尾さんに紹介してもらいたいと思います。

瀬尾：よろしくお願いします。瀬尾と申します。絵や文章を書いている作家です。こちらにいらっしゃる佐藤徳政さんが、この写真にある森の前の出身の方なので、本場の人の前で話をするのがちょっと緊張するんですけども。私は 2012 年から 3 年ほど、陸前高田というところに住んで、そこで働きながら文章を書いていました。というのもあり、私の視点

でちょっとだけお話しさせていただきます。
今映っているこの巨石が、ずっと映像の中心になっていた巨石なんですけども、これが五本松という岩になります。この岩は、陸前高田市高田町森の前という地域の中央にある大きな石なのですが、この森の前という地域は結構山際にある地域です。なので、津波が来るというような認識がなかなか無かったような、本当に山に近い地域なわけです。
でも、この岩というのは、（以前に）森の前も津波に襲われ沢山の方が亡くなった地域にもなります。この五本松という巨石が、どういうものかというのは誰に聞いてもあまりよく分からないのですが、こうして津波が来ても残るものなんですね。大きな岩なので津波が来ても残っている。昔は、一里塚のような形で旅人が来ればここに立ち寄って、この辺の集落の人とお話をしたり、「ここで休んでいる人にお茶を出したもんだ」みたいな話を聞いたことがあります。

北野：後で写真が出てくるかもしれないですが、震災前にはこの石の後ろに集会所みたいな建物が建っていたんですよね。

瀬尾：そのあたりは徳さんに聞いていただいて（笑）ここに、5 本の松が生えていたから五本松と呼ばれている。そういう岩だったんです。

北野：この石も、土地が離れた仙台でこんなに語られてるとは思われてないんじゃないですかね。

瀬尾：そうですよね(笑)。それもこれも徳さんのおかげではありますけども。

北野：陸前高田駅からも近いんですよね。

瀬尾：いや、そんな近くないですね。歩いて 15 分くらいじゃないですか。駅から駅通りと行って 15 分くらい、歩くことになると思います。今はこうして、岩のまわりに花が咲いているのですが、これもこの地元の部落のおばちゃんたちがこの土地を見捨てることは出来ないと、震災後にここに通ってずっと花を植え始めたのです。それで、弔いの花畑のようなかたちで、この集落全部を弔いたいということで花を植えました。生きている人も、亡くなった人も、今は遠くに居る人みんなで一緒に集うんだという思いを込めて、この弔いの花畑が出来はじめました。
では、次の写真に進みます。私は陸前高田には震災後にしか来たことがないのですが、最初はその津波によって壊された風景というのがとっても怖かったんです。瓦礫がいっぱいで、それ以外はずっと草が覆われているような風景だったんだけども。そんな時に、ここを通ったらもう花が植えてあったんです。それで、「何だろう？」と思って近寄ってみまし

た。
次の写真をお願いします。そうすると、よく見ると五本松って書いてあるんです。私は陸前高田というと、皆さんにとっても、一本松が有名だと思うんですけど。あの津波で高田松原の中で 1 本だけ残った一本松というのが有名で。なので、何でここは五本松と主張しているのかがちょっと謎だったんです。

北野：一本松のほうが有名になっているから、真似したんじゃないかとかね。

瀬尾：そうなんです。何かオマージュ的なものかと思って近寄ったら、「何言ってんだ、ここは五本松なんだ」という風におじちゃんに言われて。それで、こういう意味で弔いの花畑をやっていくんだという話をされて、これからどんどん大きくなっていくからお前も通ったら良いんじゃないかと話をしてもらいました。震災後に移住した私にとっては、この町がどういう場所だったかという取掛かりがなかったのですけれども、この花畑というのは、おばちゃんたちが言われていたみたいに、生きている人も亡くなった人も、そしてこれからここに産まれてくる人も皆が集える場所だ、ということで、津波で被災をした当事者の方や、沢山のボランティアさんとか、私みたいな旅の人間が集えるようなそういう場所としてここがありました。
では、次をお願いします。私は画家なので、ここで絵を描いたりしていました。この写真のように、全体像としてはとっても綺麗な花畑が作られていました。
次、お願いします。これはちょっと飛ぶんですけど、陸前高田高田町には動く七夕というお祭りがあって、森の前地域にも七夕がありました。それでここにいらっしゃる徳さんが、震災のあとに帰って来られて、この七夕の復活に尽力したということもあり、この後お話聞けたらなと思います。
では次です。それで、花畑がどんどんどんどん大きくなっていって。ボランティアさんや色んな人が集うようになっていき、本当に本当に綺麗な風景があったんですけれども、この左手の方に土の山がありますよね。この土の山というのが、陸前高田では復興工事で嵩上げ工事がとても盛んになり盛られたものです。この陸前高田市高田町の中心市街地の部分に 12m ほどの土を盛ってきて、そしてその上に新しい町を作るという計画だったわけです。それで、花畑もこの土の嵩上げによって、どんどん居場所を奪われていくようなことが起こりました。
次をお願いします。ボランティアさんたちがこうやって集っているんですけども、これは花畑の解体をしているところです。本当にこうやって皆で咲かせた花だったので、今度はそれぞれに持って帰って、そして新しい先で咲かせましょうということで、花畑を分有していくようなことが 2014 年の秋頃ですかね、皆がこういう風に作業をしていました。
次をお願いします。ということで、花畑はもう一度、失われるですね。花畑が失われると同時に、この花畑は五本松の岩の周りにありましたので、残念ながら次は五本松の岩をと

いうことになりました。ずーっと昔から津波の後にも残っていた五本松の岩なのですが、嵩上げ工事によって埋めることになりました。大切な岩なんだけれども埋めてしまうということを皆が考え、じゃあどうしたら良いか、どうやってお別れをしたら良いか、ということでこれは「五本松ありがとう会」の様子です。「五本松ありがとう会」という名前で五本松に感謝して。それで、森の前地域で昔、こうやって大きな盆踊り大会が行われていたというお話もあったので、最後にどんなお別れが出来るかということで、こうやって岩の周りで踊るようなことをしました。そして、映像に映っていましたけど、皆がこの地域で撮った写真を見ながら、思い出を話したり歌ったりということをしました。
次をお願いします。これが、今現在の五本松の岩ですね。嵩上げがとても進んでしまって岩だけがちょっと表出している状況になっています。なんで岩が残っているかというと……2015 年の春頃にこの「五本松ありがとう会」を行い、それですぐ埋まる埋まると言われていたのですが、岩だけが今も残っています。やはりとても神聖なものだということもあって、工事もここは後でやるのかなというような話も地元の人がしていたりもします。それで、花畑の方は山奥の小さな集落の方に持って行って、森の前地域に暮らしていた人たちがこの山奥の方の仮設住宅にいらっしゃるので、そこで新しく花畑としてやっておられます。2017 年に高台の住宅街ができたり、公営住宅などもどんどん出来始めているので、ここの仮設に住んでおられた人たちも皆、そこに引越しをされて新しいお家に入り始めました。それもあり、ここの山奥の花畑ももうすぐ解散するというので、今またそういう作業をしているところです。
岩も埋まってしまうということで、私もそれをどうやって残していこうかなと、絵を描いたり、文章書いたりしながら、私は写真で記録することもありますけど。もう少しイメージとかで記録していきたいなというのがあるので、こういう風にやったりしています。そんな感じで、私からの報告は以上です。

北野：ありがとうございます。こうやってあの、今回の巨石の石と人の映像と、写真を見せていただいて、瀬尾さんと小森さんたちが陸前高田の森の前地区や五本松のある場所を、大きなモチーフとしてされて、そこで見聞きしてきたことが、記録や作品に大きく影響しているんだなと改めて……。

瀬尾：そうですね。私たちは結構、ここで起きたことを記録したり、そこから表現につなげるということをさせてもらっていますね。でもそれは、やはり徳さんが居たというのも結構大きかったりするのですよね。徳さんの話も聞いていきたいんですけど。

北野：では、徳さんの前にもう一つだけ。今、やはり花畑も移るということで、仮設の場所で復興工事の嵩上げをするので、移動しなければというのは分かっているんですけれども、やっぱりそこに花畑を作って、それを自分たちの手で壊すという作業も自分たちでや

んなければいけないというのが、最近『息の跡』の小森さんの映像もありますし。（瀬尾さんの話の中にも）出てきていた復興の家がちょうど建てられてきているので、仮設の家からまた引っ越しをする作業も、その一人一人が家の中で暮らしを仮だけどつくって、またそれを自分で壊すというのが、仮と分かっていても壊すというのは結構、その当事者にとってはしんどいなというのがありますね。

瀬尾：そうだと思います。仮設住宅で出来たコミュニティというのもありますし、そこでしか出来なかった関係性とか。あと、共有できていた話、会話というものがあったんですけども、それをもう一回この新しい場所に行って、新しい生活で新しい人たちともう一回、被災された方たちが、前提をそれぞれ探らなければいけないというのはあると思います。誰がどのくらい被災していて、自分はどういう立場で、ということは被災しなければ無かったことですよね。プライベートなことだったり、誰が誰を亡くしたとか、どのくらい財産があるとか。本当は、そういうことは触れなくても良かったことなのですが。それが引っ越し先を選ぶとか、家の大きさとかで、もう一回明るみに出てしまって、それが共有され。その前提条件をもう一度ということも、関係性を組むことも、とても色々な分断があって大変な中で、何度も繰り返されているのかなとは思いますね。

北野：先週、震災遺構がテーマのてつがくカフェに行ってきたのですが、そこでの発言でも、福知山の電車事故では何号車両に乗っていたとか、阪神淡路大震災では何区・何市で（被災した）とかで分けられているとお話しされていました。それで、被害者の方々に会った時には、まず挨拶のように、自分を提示することがすごく多いそうです。隔たりや違いというのを最初に表明させてしまう。プライベートなことを聞いて大丈夫なのかという心配があるなかで、（最初に自分から表明することで）安心感があるのかもしれないですが、それぞれの事故や災害でも、同じようになるのだなと僕も最近気づきました。
それで、お待たせしました。今度は、陸前高田の五本松がある森の前地区のお生まれで、今は陸前高田で映像に映っていた七夕のお祭りや神楽、踊り、舞などをされている佐藤徳政さんにお話を伺っていきたいと思います。まずは、今日このようなシアターで自身の映像を観てみていかがでしたか。率直な感想など。

佐藤：率直な感想としては「良かった」という感想です。小さい普通のテレビ、モニターではもちろん観たことがあるのですけが、大スクリーンというのはやっぱり迫力があって。やはり普通のサイズのモニターより、一個一個がすごく入ってくるというか。

北野：個人的に一番良いなと思われたシーンはどの辺りですか。

佐藤：やはり神楽のアップのところですかね。

北野：では、自己紹介と共にまた振り返っていただきたいと思います。

佐藤：簡単な自己紹介をさせてもらいます。僕は、高校を卒業して、東京で１年働いた後に、名古屋のデザイン学校行き、その後は東京に戻ってデザイン関係や設計関係の仕事、をしておりました。そんな時に、28, 9 歳の時に震災がきて、その一年後の日の１日前くらいになんとか滑り込んで陸前高田に戻りました。
そこで、家族や実家はもちろん、地元や町もなくなってしまったので、「もう、やるしかない」という思いで、色々とやっていこうと考えた時に、まずは七夕を復活させようと動きました。そこから、今日の映像の方にもある程度は入っていましたが、色々な活動をしています。その他にも色々やってはいるのですが。
映像の方の説明させてもらうと、最初の写真を見ていたシーンは、私の曾祖父さんが、写真館をやっておりまして。あ、この写真が、私のおじいさん。まあ、似てないですけど。

北野：ちょっと似ていると思ってしまう。

佐藤：この勲章は何かというと海軍で、それなりの地位があったようす。まあ、地元では岩手県の中でも名士という位置づけで、卒業式の来賓とかに白いバシッとした格好で登場したりして結構目立っていたそうです。そんな曾祖父さんがその海軍で写真技術を習い、それで戻って開業したんです。今映っているのが、その曾祖父さんやその息子が撮った写真です。これは五年祭の写真かな。

北野：これは高田町ができて５年目のお祭りということですかね。

佐藤：ん？

北野：５年祭は何の５年祭ですかね。

佐藤：５年に一回、そうですね。この写真は、当時写真館が珍しかったもので、貴重な写真になるんですけど。映像には瀬尾や小森も一緒に居ましたけども、私のじいさんの妹の自宅に、映像を撮り昔の話を聞くという行為をしに行いました。何をしに行っていたかというと、昔の祖父さんや曾祖父さんの仕事を感じたいと言いますか。そのおばさんが亡くなる前に色んな事を聞いておかないと、事実が何も分からずに、何も継承されていかないということで残しておこう思い、話をしてきた様子がある訳です。
今ですね、知り合いや隣町の方のご自宅に、佐藤写真館の写真や、祖父さんか曾祖父さんが歩いて撮りに行った写真などを探すということを始めていて、何枚かは集まってきてい

ます。後々、それを見せる機会が出来るかどうか分からないですが、そのように活動する中で、直接祖父さんが撮った写真を見ると、何かすごく考えさせられると言いますか、胸がざわざわするような感覚を覚えています。そんな体験をしながら、活動を続けています。
それで、次の写真が七夕ですね。こんな感じです。これは震災後なので、周りに家がないんですけども。その前の写真は、これは因みに私が中学校くらいの写真で、真ん中が私なのですが、その後ろには街並みがありました。普通に街並みがあるところを引っ張って動くような祭りだったのですが、正直この時代は、特に深い意味も分からずに半分義務みたいな感じで出ていました。なので、決して祭り馬鹿とかそういうのではなかったんですね。
それで卒業した後は、一度も出たことがないぐらいの感じで。普通といいますか、そんなに思い入れはありませんでした。ただそれが唯一の高田の祭りで、一番人が賑わうお祭りだったので、これは復活させなければと思いました。人の気配がもうない中で、このまま黙っていられないと思い、復活させるということを始め、皆さんに協力してもらいながら、先頭立ってやりました。

北野：高田では、その動く七夕は 2012 年に復活していますよね。森の前ではどうだったのですか？

佐藤：私はそのとき東京にいたので、元森の前の人の何人かが隣の組にちょっと手伝わせてもらっているだけでしたね。

北野：全体でいくつかの集落ごとに動く七夕の山車を出しているそうで。 2 , 3 地区ぐらいですか？少しの地区は 1 年後に復活できたけど、地区によっては 2 年、3 年経っても復活できてない地区があるようです。森の前は徳さんが戻って来た 2013 年から復活したんですよね。

佐藤：2012 年に戻って来たんですけど。2011 年には 3 組しか出なかったのが、2012 年には 6 組ぐらい出たんですが、そこでも森の前は出していなくて。俺も 12 年には戻ってはいるのですが、最初は人集めに集中しました。人集めと言ってもそんなにいないんですけど。若い同年代にだけに声をかけ、T シャツを合わせるぐらいのことをまずはし、山車の再建についてはゆっくりやっていこうとは思っていました。
それで、13 年にはそのような流れもあり勢いでやることになり、山車をやっと再建出来ました。ただ、震災で山車も太鼓も流されてしまったので、地元の大工さんゼロからまた作ってもらいました。地元の大工さんも色んな工務店にいるんですけど、あえて違う工務店に頼んだりもし、寄付や助成金、他にも色々動いたりし結構なお金をかけて、何とか形にしました。
この写真が、4, 50 年前の七夕の様子なんです。夜はこういう風に綺麗に。

北野：ライトアップするんですね。

佐藤：ええ。これが 2013 年の写真です。復活させた最初の年ですね。この復活させた最初の年が一番格好良くて、一番綺麗だとは思うんですけど。実は昨年は、やはりどんどん人も少なくなり手が回らなくなり、夜はできなかったんです。森の前だけでなく、他の部落もそういう風な感じで減ってきてしまってるのもあるのですけど。

瀬尾：嵩上げ工事が始まってから、駅通りの辺りは一番山車が集まってくる道もどんどんなくなってしまっているんです。昨年は、進みすぎた山車が十数個集結するところが見所だったのですが、それが道が分断され過ぎて集まる場所も無くなってしまったんです。イオンの駐車場でしているところもあれば、海辺の倉庫のような場所でしているところもあるような感じで。お祭りを継続することには、皆すごく注力してくれているのですが、やはり環境的にできないことがどんどん増えているという感じですね。そろそろ神楽の話も良いのではないですか。

佐藤：そうですね。「ありがとう会」については先ほど話しましたから。では、神楽の話をします。この神楽は、昨年の 5 月に私がつくったものです。神楽というと、「今まで高田にあったのか？」というような話をよく言われるのですが、（陸前高田に受け継がれてきた神楽は）一切なく、この神楽は私が（独自で）つくって、私が踊っています。
この下にある岩が、五本松の岩です。クランクアップの時の写真なのでちょっと明るいですけど、実際はとても暗い中で、時間的には朝の 4, 5 時頃にやっていました。内容も、この土地のこの五本松界隈の物語を入れ込んだ 5 つの演目を用意し、そのストーリーに合わせた曲や型を考えました。それを凝縮したものを舞っています。

北野：僕の率直な感想は、神楽ってつくれるものなんだなと。その動きも、意味合い的にも、もしくは神事と聞いていたので、つくれるものなのかと率直に驚きが生じたんですが。なぜ神楽だったのでしょうか。他の方法でもあったのではないかとも思うのですが。

佐藤：他の表現、演劇やダンスあるいは他の表現と、色々と考えてはみたのですが、やはりその物語を伝えるにあたって、オーソドックスと言いますか、そういう昔の雰囲気みたいなのものが必要だなと思っていて。そうなると、ダンスや演劇では、そういう威厳ある雰囲気は出ない気がしました。とはいえ、神楽を知っているかと言われたら知らないですし、私もあまり学がないもので、あまりよく分からないんですよね。1, 2 回見たことはあるのですが、「なんか長いな」とか「何か伝えたいんだろうな」というくらいの感想でした。色々とその程度でしたし、振り付けの経験もないしで、何も無い状態だったんですけれど

も、「うわうわ！なんだこれ！」「何やってんだ！」みたいな、そういう怪しさのような現実的でない雰囲気を演出したくて、そういうイメージで本当に即興というか、時間もほとんどかけずにやってきました。実は、2, 3 週間ぐらいで全て考えてやりました。
今お話ししてきたこれまでの活動を、この神楽に詰め込みたいと思っていたのもあり、この映像をつくったわけです。本当はこの神楽をインパクトある感じにして、世界に発信すれば、話題性になるかなと思った部分もあり。今はインターネットで直ぐですからね。またそれで興味を持ってもらって、ここに来てくれれば良いなと思い、それで作った訳なんですけど。思いの外良い感じに出来たなというのと、神がかった雰囲気も出たなとも実感しています。実際にここに観に来ていた人たちも 7, 8 人いたのですが、みんな高い評価をくれました。実際に、瀬尾も観ていたと思うのですけど。

北野：どうでしたか、実際に観てみて。

瀬尾：いやー(笑)。徳さんが「神楽を踊ろうと思う」と言った時に、既に結構衝撃的だったんですけど。でも、何かとても納得できたんです。こういう震災があって何にもないと言われてしまうこともあるような場所に、ここにもちゃんと物語があるんだということを、彼は色んな方法で伝えていたんですよね。それで今度は、それを継承出来るような形にしていく時に、「神楽」というのは「そりゃそうだよな」と。ここに戻るというか、その方法があるというのは、とても納得がいくことだなと思い、徳さんが踊る神楽を観てみたいと思ったんです。それで、とりあえずそのアイディアを聞いた人たちが大騒ぎして、「徳さん、やった方がいいよ！」みたいな感じで、みんなで盛り上げたんです(笑)。というのが一年くらい前ですかね。とても懐かしいなと思うんですけど。
それで、実際に徳さんが踊るとなった時に、いわゆる伝統的なイメージを持ちつつも、「神がかった」イメージをきちんと引用しつつで、作られました。あの色んな音楽も、徳さんが自分で iPad を使って打ち込みで作っていたりするんですけども。あとは、それこそネットで配信できるように、Facebook のメッセンジャーで送れる９０秒に編集するなど。今の時代にフィットするような形でサクサク作ってくんですよね。それこそ 3 週間とかで作っていく。
実際に徳さんが踊った時に、「ああ、こういうことなんだな」と思って、それはとっても良い時間だったんですね。この場所で踊られる必然というのが本当にあるんだなと思いました。それで徳さんが、その五本松の物語があるということを、世界に発信したいというイメージで作り始めたのですが、実際やってみたら物凄く尊いものが出来てしまったと言いますか。あまりに大事なものになったので、発信するのもそんなに違わないかという風になったんです。
みんなで話し合った時にも、自分の息子に踊ってもらいたいとか、一年に一度、五本松のあった場所の上で踊りたいとか。そのような感じで、とても大事なものとして扱っていく

やり方が出来てきて。そのことも、「そうなるんだなぁ」というふうに思っていました。で、最後のシーンでの、何か。

北野：みんなでもぞもぞ

瀬尾：そうそう。みんなで群舞するようなシーンがあって。あれは、神楽の第5章のところで、盆踊り的なパートがあるんです。自分一人踊るパートだけでなくて、人を巻き込んでいくような踊りとして、その一部を開いて行くこともしているというのが、何て言うんですかね、選んでいく一つ一つの必然性がすごくあるなと思いました。徳さんは、見た目はちょっとヤンキーみたいな(笑)、始めて会った時、若干怖いなと思ったんですけど、（その見た目とは違って）そういう選択の理由、必然性は本当にしっかりしていると思うんです。神楽だということもあるし、皆で踊るんだということとか、五本松の物語は大事なんだという、その一つ一つの選択というのがものすごく真っ当で、そこにとても感動しますね。
それは、徳さんのすごい部分でもあるし、五本松の周りで花畑を作っていたおばちゃんたちの、あの花を植えなきゃいけないんだという思い、嵩上げになると分かっていても植えなきゃいけない、でも嵩上げになったらじゃあみんなで解散しよう、そして花を抜くところまで一緒にやっていくというその真っ当さにとても近しいものだと思います。沿岸部で出会う、そういう一つ一つの所作ですね。そういう弔いの所作みたいなものに私はとても救われました。すごく喋ってしまいましたけど(笑)、そのようなことを思い出しながら徳さんの話を聞いていました。

北野：（神楽は）複数の人が匿名で踊れるように「神楽衆」と呼ばれていると思うのですが、先ほどあった弔いという意味合いも、その五本松神楽の中に入っているのでしょうか。もしくは、その5章の意味や踊りの振り付けの意味に、弔いの意味があったりするのでしょうか。

佐藤：はい。五本松神楽は5章あります。各章1分半ずつの内容で構成していまして、全部で7, 8分くらいになります。まず一つ目は自然ですね。端的に高田町に海川山というのがあるので。これがその神具です。神具も即興なので、100均でささっと作ったりしています。

北野：言ってしまって良いのですか。

佐藤：今回は皆さん特別に。

瀬尾：秘密にして欲しいですけど(笑)

佐藤：秘密を公開。まあ秘密にしておいて欲しいですけど。実はこのお面も、こういう翁のお面をイメージしていて、すごく格好良いと思ったのですが、実際につけてみたら前が見えなくて。壁掛けのただの飾りだったんですよね。やけに小さいなと思ったり、そういうオチが実はあって。勢いでなんだか気分が良くなってきたのでバラしますけど。なので、今のような話を抜きに先ほどの映像見ると、「おおーっ」と印象を受けられたと思うのですが、実はそういうお茶目なネタが結構いっぱいあります。殆どそんな話ばっかりです。でも、最終的に帳尻を合わせて仕上がりはあそこに持っていくっていうのが。

瀬尾：5章の話が聞きたい(笑)

佐藤：5章の話に戻ります。一つ目が自然感を。千年前、二千年前の自然をイメージしています。
二つ目は道慶さんですね。村上道慶さんと言って、400年くらい前にその五本松の近くに住んでいた寺子屋の先生がいまして。当時、大雨が降って川の流れが変わったことによって隣町との紛争が起き、たくさんの人が亡くなっているんです。それを止めるために、自分がその川の中で首をはねて、それで平和をおさめたという話があるんです。その人の顕彰碑が五本松の岩の上に建っていました。倒れてしまったので映像にはないですが、顕彰碑が建っていて、そこでも私も小さい頃は遊んでいたりしていました。その道慶さんの話を2章に入れ込んでいます。
3章は、震災がきたので、東日本大震災の話を。地震がきました、津波がきました、人が逃げました、何も無くなりました、という項目を振り付けにした感じです。
4 章は、先ほどお話しした「ありがとう会」をしていた時に、山から鹿が降りてきまして。いつもは見たことがないのですが、五本松神楽をやっていた時にちょうど降りてきたんです。それがなんだか神のように感じまして、その鹿を神に見立てた演舞を、鹿が出てきて目出度いという思いで作っています。
そして5章は、1〜4章までは時系列になっているなかで、簡単に言えば、色んなことがあるけども皆で仲良く手を取り合って頑張ろうという精神論でいます。内容については、その都度変えていこうとは思っています。「伝統」というのは、一つ決まったことをずっと継承していくイメージがあると思いますが、関わる人と常に最善を尽くすというスタンスでやるのもありかもしれないとも思っていまして、模索しながら進めています。

北野：今まで何回ほど舞っているのですか。ちなみに最初はどのタイミングで舞ったのですか。

瀬尾：その話します？長くなりそう（笑）

佐藤：5 月 3 日ですね。5 月 3 日に 1 回と、あとは七夕の前の日に 1 回ですね。巨石の上で舞っているのはその 2 回だけです。大人数でやるというのは、七夕の日に 1 回やっています。今度また 5 月にやりたいと思っているんですけども。基本は 1 年に 1 回か 2 回、この岩の上でやりたいとは思ってはいます。というのも、今年にはこの岩も埋まってしまうので。この間役所に聞いたところ、本当に埋まってしまうと言っていました。来年は間違いなく絶対にないと言われているので、多分 5 月に舞うのではないでしょうか。

瀬尾：ぜひ観に行ってください。

北野：以前、見世物に関する民俗博物館の展示を見た際、江戸時代や明治時代から今の見世物小屋やサーカスがあったようなんですけども、明治時代に西洋のサーカスが来た時に、それが話題になり全国を行脚したようで。それが名残で全国各地に残っている無形文化や舞などの芸能の中に、明治時代に見た西洋の名残みたいなものが残っているような型があるという話を知りました。今回、「神楽が作れるんだ！」とシンプルに思ったのですが、2000 年前からの震災とその跡を 5 つ刻みながらつくっているというのは、50 年後、300 年後に残っていたら、今みたいなお茶目なエピソードは忘れ去られて残った時に、新たな伝統ができる可能性もあるのかなと思ったんですけどもね。

佐藤：お茶目な部分も含めて、残す必要があるかどうかですね。

北野：巨石は残せないですからね。

佐藤：そうなんです。巨石は残せないですからね。もう間違いなく埋まってしまって、目には見えなくなるので。映像や写真でしか。この活動は、全て私が先導に立って動かしているわけですけども、はっきり言ってしまえば、何もやらなければ何も無い訳ですよ。
逆に言えば、私がスイッチを 5 つ入れれば、このようなカラフルな映像と記憶が出てくる、残ってくるわけです。なので、埋まる前にきっちり思い出を作っておいて、かつ今からではなく以前の七夕や、写真館の話もそうですし、色々な人の話なども含めて、巨石がみた景色やその空気感をわんぱくに残して、かつ色々な表現で力を渦のように動かしていきたいと思っています。
そういう位置づけで、「巨石装置」と見立て、11 月にここで展示をさせてもらったのですが、装置の部分には「創造の聖地」という意味を入れていて、なのでこの岩からどんどんクリエーションを出し続け、「創造の聖地」と認識されるような場所にしていきたいと活動を続けているところです。

北野：ありがとうございます。
今、動く七夕と隣町の喧嘩の七夕を一緒にやるようなことも検討されていると聞きましたが、そうした中で確かに新しい型や方法が出てくるのかもしれないですが、そのように場所や土地がなくなるという時に、動く七夕や神楽のような芸能や文化を残していくことの意味を僕は感じました。それで瀬尾さんに伺いたいのですが、瀬尾さんが陸前高田に行って見ている時、徳さんの動きというのはどう見えるものなのでしょうか。陸前高田では皆さん、このような活動をされている方が多いのですか。徳さんの活動を、内から見た時と我々のような外から見た時とでは、その意味合いや意義は違ってくるのでしょうか。

瀬尾：どうでしょうね。高田の人が見た時にどう見えるのかというのはよく分かりません。徳さんも、特に七夕で人間関係に苦労されたこともあり、そんなに高田の中で目立つことはされないようにしていたりするので。皆がそれぞれに色々な気持ちがあるので、徳さんがされていることがどう見えるのかということは、結構難しい人もいるかと思います。直接見ることが難しい人もいるかもしれないし、どこかで羨ましいなとか、あんなに色んなことをできて狡いと思っている人もいるだろうし。それは本当に羨ましいという気持ちだと思うのですが、そういう人ももしかしたらいるかもしれないですね。
今ひとつ思い出したことがあったのですが、私は徳さんが神楽をやっている写真を Facebook にあげてしまったことがあるんです。そしたら、「これは誰だ！？」と高田の人たちが騒ぎ出して、それで、「これは、信三郎さんなんじゃないか？」というコメントが入ったのですが、その信三郎さんは実は徳さんのお父さんで。徳さんのお父さんがこの神楽をやっているのではないかと、周りの集落の人が思ったようなことがありました。
実際には徳さんが引っ張ってきていて、実際にやれる人は徳さんしかいないのかもしれないのですけど、陸前高田でこういうことをしたい人、もしくはこのような思いを持っている人が無数にいるということを、高田の人が了解してくれているというのはあると思うんです。確かにこのような神楽が生まれて然るべきだなとも思うし、この土地の物語を残すために何かをやるべきだと思っている人も、もしかするとたくさんいて、それが徳さん以外の誰にでも成り替わる可能性というのは、誰もが想像力として持てる状況があるような気がするんです。この神楽も、踊る人が変われば形はかわるだろうし、いろんな可能性があると思います。10 年後に、岩を見たことがない子どもたちが、違う踊り方をしているかもしれない。だけど、ここに物語があったということだけは、きっと了解されているということが起きてくるのだろうなとは想像したりします。

北野：ではそろそろ時間なので、最後に何かあれば一言いただけますか。

佐藤：今年は、いよいよこの神楽を公開する段取りをしておりまして、近いうちにみなさ

んの目に入るところです。とはいえ、その情報といいますか、その状況だけが完成体ではないので、その都度その都度に最善を尽くしてやっていくつもりです。来て見てもらいたいというだけの次元でもなくて。今年はある程度、開放していく年になるかと思います。35 歳で年男、酉年なので、今年は飛躍しようと。一般的な抱負も言って。空飛ぶ鳥を目指しますと会社で言っているのですが、言ったらやるようにしていますので、踏み込んでやっていこうとは思っていますね。

北野：では、神楽の映像を見られるのを楽しみに待っています。
また、瀬尾さんも大阪の方でダンサーの方とテキストと身体を使ったプロジェクトも進んでおられると思うので、また改めて身体の表現と物語、言葉を考える機会があればと思っています。

瀬尾：そうですね。身体の表現と継承というのはとても重要だなという風に思っていますね。

北野：ありがとうございます。今日のトークはここまでです。今日はありがとうございました。